

# ぶつくとく

本書は、農民作家として知られる著者の最近の評論集である。現在進みつつある世界的な農業自由化の動きと、日本における「農業潰し」に対し、強い怒りを著者は本書でぶつけている。

著者によれば、この急ピッチの農業潰しによって、農村から「人、作物、農地」が奪われつつある。既に「人」と「作物」は旧農業基本法のもとで大きく失われてきたが、今回の新基本法制定で企業の農業参入に道が開かれ、最後の「農地」までもが農民から奪われつつある、という。

かくも「農業・農民潰し」が急ピッチなのは、三つの理由があるという。第一は、ゼネコン型政治・経済体制である。多額の税金の実に半分がたいして必要でもない公共事業に使われる一方で、社会福祉や農業の予算が削られている。第二は、アメリカへの隷属である。「人の痛みを知らない」アメリカの主導による経済のグローバル化に対し、日本政府の対応はあまりにも追隨的で弱腰である。そして、第三に金持ちになる過程で日本人が拝金主義に陥り、経済以外に農業がもつ価値を見失ってしまったこ

とである。

本書はさまざまな場で発表された評論等を編んだもので、こうした日本農業の現状に対する打開策が体系的に展開されているわけではない。そこを敢えて筆者なりに整理するならば、以下のようになるだろうか。

一つは、全中が指導する農政運動のあり方を変えることである。これまでは、コメの自由化反対運動に象徴されるように、「一所懸命やった。しかしだめだった。結局しようがない。」という玉砕型の運動であった。「玉砕型」の運動に代わって著者が主張する

## 『何のために農業が必要か』

坂本進一郎著(御茶の水書房)

のは、EUの運動のようにしたたかな「提言型」の運動である。特に、市場原理導入がもたらす農産物の価格低下に対し、デカップリングによる十分な直接所得補償制度の導入が絶対に必要である。

第二に、「内なる自民党(お上意識、利益誘導的な古い政治システム)」と決別して、高い志をもった市民運動をもりたて、農業者自身が政治を変えていくことである。陳情型の政治システムから、農業者が運動の担い手となって社会を変えていく政治システムへの転換が必要である。

そして第三に、「世界規模の市場」に對置するために、私たち自身の食生活を見直すことによって、「身土不二」や「自給自足の理念」を回復し、「コミュニティ型市場」を創出することである。

本書は、こうした日本の農業問題に関する評論の他に、カンボジアの政治家ポル・ポトに捧げられた詩や、歌人石川啄木についての評論も収められ、著者の思想と文筆活動の広さを垣間見せている。

著者は、大学で経済学を勉強して北海道東北開発公庫に勤めたあとモデル農村の大

湯村に入植した異色の農民である。したがって、その鋭い政治・経済意識、海外にまで農業視察に出る行動力と経済力、幅広い文学の素養などは、現在の日本の農家全体を代表するものではないだろう。

しかし、企業的な農業者や環境意識の高い農家が育つこれからは、著者のような鋭い論客が若い農業者の中から陸続と現れることを期待したい。そして、日本農業を現状に追い込んだ政治家や役人、既成の団体、そして学者などの間違いと嘘を暴き、国内だけでなく海外の農業者や消費者達とも交流を深め、日本農業を変える運動の先頭に彼らが立つていくことを願うのは筆者だけではないだろう。

(一九九九年十二月、二二四頁、二、〇〇〇円)

(須田敏彦)